

コロナ禍と私

南山大学人文学部心理人間学科 土屋 耕治

コロナ禍と呼ばれるこの時に感じたいいくつかのことを書き留めておきたいと思う。

第一に向き合わざるを得なかったのは、私たちが自然環境の変化に対して本質的に受動的な存在であったということだ。「主体性・自律性」という言葉、また、ポジティブな意味づけというような言葉は、能動的な存在としての人間と関連が強い言葉たちであると思う。前のめりとも言おうか。科学、メカニズムの理解、支配といったことも関連して思い浮かぶ。「疫病は過去のものであり、科学がそれを克服していく」といったある種の近代的な捉え方であったり、予測とかコントロールとか、そういう考え方も馴染み深い。

しかし、コロナが突きつけたものは、大きなインパクトによって、「あの頃の未来」(『夜空ノムコウ』より)がたやすく失われ、それを生きるしかないという現実である。コントロールできていると思ったり、自然環境とうまく付き合えていると思っていたことが、そうではないことを知ることになる。

一方で、コロナ禍によって見えてきたこともある、…ということを書きたくなるのが常であるが、今はそれを書きたくはない。

私の好きな思想家に、シモーヌ・ヴェーユという人がいる。彼女の言葉の中に、「純粋さは、穢れを観想する力である」(シモーヌ・ヴェーユ著作集5『重力と恩寵』p. 216)というものがある(前に作成した日めくりカレンダーでは、「純粋さとは、汚れをじっと見つめうる力のことです」と紹介している)。この言葉の意味を考えている。

見たくないものから目を背けるでもなく、反動としてポジティブな意味づけをするでもない。また、手に入らなかったものの価値を下げ、手に入らなかった辛さを和らげる、いわゆる「酸っぱい葡萄」という防衛機制でもない。

こうした時にできることは、そこに新たな意味合いを見出すことではなく、また、ネガティブに明け暮れるでもなく、今を今として見つめていくことでしかないのだろうと、それが生であらうと、思っている。

とまあ、これもまた一つの意味づけなのかもしれないが、嫌なものは嫌だ、とそう思う自分がそこにいることを認めたいと思う。

引用文献

シモーヌ・ヴェーユ 橋本一明・渡辺一民(編)(1968). 重力と恩寵: 救われたヴェネチア (シモーヌ・ヴェーユ著作集3) 春秋社